悲しみの海

すずらん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悲しみの海

【Ｎコード】
Ｎ５００８Ｙ

【作者名】
すずらん

【あらすじ】
ただの無気力。
そんな主人公が巻き起こす波乱万丈の男子校生活。
※ＢＬです

人物紹介（前書き）

他の作品もちゃんとできてないですが
アイディアだけ思い浮かんでしまって（・ω・）
とりあえず、今回もぐだります。

人物紹介

身内てきな。

——————————————————————————————
——————————————————

俺、主人公
長谷部(はせべ)　拓海(たくみ)
／眼帯／身長１７２ｃｍ／高２／無気力

——————————————————————————————
——————————————————

俺の兄
長谷部(はせべ)　浩太(こうた)
／お人好し／身長１８０ｃｍ／２２歳／サラリーマン／真面目

——————————————————————————————
——————————————————

俺の弟
長谷部(はせべ)　明良(あきら)
／不良／身長１８３ｃｍ／高１／ブラコン

——————————————————————————————
——————————————————

俺の親友
滝川(たきがわ)　輝(てる)
／バカ／身長１７８ｃｍ／高２／拓海と同室／楽天的

——————————————————————————————
——————————————————

輝の弟
滝川(たきがわ)　空理(くうり)
／バカ／身長１７５ｃｍ／中３／ハイテンション

人物紹介２

同じクラス

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――

王道転校生
鳴瀬（なるせ）　由宇（ゆう）
／うざい／身長１６８ｃｍ／変装。マリモ／高２／弾丸トーク

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――

脇役
間宮（まみや）　楓（かえで）
／ビクビク／身長１６４ｃｍ／顔平凡／高２／中身可愛い

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――

爽やか少年
鴇田（ときた）　志羽（しう）
／身長１７６ｃｍ／高２／イケメン

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――

不良
山崎（やまざき）　殻（かく）
／身長１７８ｃｍ／高２／鳴瀬の同室／無口

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――

人物紹介２（後書き）

随時最新

自己紹介３

生徒会のやつら

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――

俺様生徒会長
高野（たかの）　幸次郎（こうじろう）
／権力者／身長１８３ｃｍ／／高３／鳴瀬らぶ

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――

腹黒副会長
吉野（よしの）　猛（たける）
／常識人／身長１８４ｃｍ／高３／拓海らぶ

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――

チャラ男会計
池島（いけじま）　聡（さとし）

諸注意

初めまして。
今回は数ある作品の中から
この「悲しみの海」を選んでくださって有難う御座います。

この作品はフィクションです。実在の人物、団体、事件等は一切関係ありません。

この作品は男同士の恋愛、性描写を含むＢＬ小説となっております。拙い文章もあるかと思われます。あらかじめ御了承下さい。

上記の２つどちらとも大丈夫だ、という方のみ閲覧よろしくお願い致します。
なお、閲覧は個人様の自由に任せますので誹謗中傷は受け付けません。
誤字脱字等を見つけた方はコッソリお知らせくださると助かります。

物語の都合上、未成年の飲酒シーンが登場することもしばしばですが、
決してそれらを助長する目的はございません。

以上を踏まえて、それでも見たい！という
奇特な方がいらっしゃいましたら、どうぞご覧くださいませ。

＊すずらん＊

主要人物

＊あいさつ。

「輝（てる）、そろそろ起きないと集会遅れる。」
「ん……。わーかってるってばぁ…。」
「…分かってない。」

俺は同室者であり幼馴染の輝を起しながら携帯で時間を確認する。
今日は８時半から生徒集会があるのに、輝は全然起きない。
ちなみに今の時間は８時１５分。流石にちょっとやばい。
昨日の夜遅く、いや正しく言えば今日の朝までＢＬ小説を読んでるから寝過ごすのだ。

「輝、おいてくけど」
「おー……」

大体、一緒に読んでいた俺がちゃんと起きているのにコイツだけ気持ちよく寝ているなんて許せない。
とゆうか、朝起きれないやつは夜更かしする資格はない！
と心の中で輝を罵倒しつつ部屋をでる。オートロックなので鍵を掛けなくてすむ。
こういうときに金持ち学校は便利だと思う。

今俺が通う鳴瀬（なるせ）学園は、

学力・経済力・武術・その他歌唱力などさまざまな才能に富んだ生徒が通う学校。所謂、エリート校だ。

能力により学科が分けられていて、順番に
進学科・経済科・工業科・芸術科となっている。
そして、その中でも特に抜きん出た才能を持っている者達は特進科へ進む。

ちなみに俺、長谷部　拓海は結構頭がいいらしく、特進科所属だ。
俺の同室者の、滝川　輝も俺には劣るが頭がいいらしく、同じく特進科だ。
ただ、輝の場合、父親が世界中にチェーン展開しているホテルＴａｋｉｇａｗＡの社長なので、
経済力も非常に高いのだ。

.

主要人物2

３８歳の若さで社長をしている輝のお父さん一拓(たく)さんはとてもかっこいい。
しかし、その息子の輝は、男同士がいちゃつくのを見るのが好きな、所謂『腐男子』という残念なやつなのだ。
まあ、俺もその部類に入り、腐男子に誇りを持っているが。
昨日も、いや正しく言えば今日の朝も、一緒に最近はまっているＢＬ小説を読みながら
最高のＣＰについて熱く語り合っていたのだ。
…そのせいで寝坊したわけだが。

俺と輝の出会いは１０年前。
母親と当時１２歳の兄の浩太と６歳の俺と５歳の弟の明良が輝の家の隣に引っ越してきたのがきっかけ。
輝にも４歳の弟がいて、浩太は少し年上だったけど、似たような年齢の俺達はすぐに仲良くなった。
そしていつの間にか俺は腐に目覚めそれと同じ時期に輝も腐目覚め、そこから俺達はうふふ腐腐なお友達になったのだ。

輝は所謂金持ちなので、それなりの学校に通っていたけど、俺は平凡家庭なので
公立の小学校、中学校、高校に通っていた。
でも、諸々の事情で全寮制である輝の通う鳴瀬学園に夏休み前から編入することになったのだ。

そして、そこの生活はまさに天国…！
この学園は男子校で、生徒会は人気投票式で、閉鎖空間で、同性愛

者が多くて、
何を取っても”王道学園”なのだ！

そこに、王道転入生が来たのだ！
もちろん、俺ではない。俺の１ヶ月前に転入してきた
鳴瀬学園の理事長を叔父に持つ”鳴瀬（なるせ）　由宇（ゆう）”だ。
入学テストを５００点満点中４６０点という高得点でクリアした頭
脳の持ち主で、
その外見は、黒まりも…いや、オタクだ。
ボサボサカツラに牛乳瓶底メガネ。まあ、これも王道要素だ。
きっと、どこかの族に所属しているに違いない。

生徒会長補佐のチャラ男には可愛いと気に入られ
生徒会書記の双子を見分けては気に入られ
生徒会会計の途切れ途切れの言葉を理解しては気に入られ
あげくの果てに生徒会長にキスをされ蹴り飛ばせば気に入られ
唯一常識人の副会長を除いた生徒会全員に気に入られた挙句、
さらには特進科の爽やか青年にも気に入られ
同室者の一匹オオカミ的存在の不良には懐かれ
まさしく王道！
ビバ！王道！！

.

主要人物3

だが、王道は王道でも、やつは［うざいほう］の王道なのだ。
ここでいう［いいほう］の王道は、常識があるというかなんというか。
ここの王道転入生は、わが道を突き進む！タイプのやつで、まあ自分の世界に生きるやつなのだ。
実際、王道転入生でなければ、絶対に関わりたくないタイプの人間だ。

だが！ここは王道転入生。俺は温かい目で…いや、腐った目で見守っているのだ。
あくまで、見守るだけで、関わるつもりはまったくないのだ。
でも、王道転入生…面倒だから王道と呼ぼう。
王道は特進科で、俺も特進科で、嫌でも関わってしまうのだ。
それに、なぜか俺は王道に懐かれてしまった。
いや、理由は分かりきっているのだが、懐かれているという事を認めたくない。

教室で会うたび会うたび付きまとってくるのはやめて欲しい。
もともと人と関わるのが苦手な俺としては、毎日迷惑している。

しかし、生徒会に気に入られている王道。
王道を邪険に扱うと、生徒会が黙っていないだろう。
しかし、仲良くしていても所謂焼き餅というやつで目を付けられる場合、どうすればいいのだろう。
とりあえず俺は、毎日愛想笑いを貼り付けている。
その所為で頬の筋肉が可笑しくなりそうだ。

などと考えていると、いつのまにか体育館についていた。
携帯を開いて時間を確認すると、８時２５分。ギリギリセーフだ。
体育館に入る前に輝にメールを送り、目の前に聳え立つ大きな扉を開く。
もう殆んどの生徒が整列していて、俺も急いで特進科の列を目指す。

主要人物４

特進科の最後尾には、特進科きっての爽やかイケメンの”鴇田（ときた）　志（し）羽（う）”が座っていた。
その場所に駆けつけたときに、丁度生徒会が壇上に上がった。

「おはよー、長谷部。遅かったな。滝川は？寝坊？」
「おはよう。そんなところ」

背後でキャーとかいう野太く黄色い声が聞こえる中、
何事もないように言葉を交わす。

『静粛に』

そんな中、リンと通る綺麗な声が体育館中に響き渡り、一斉に声が止む。
その声の主は、副会長の吉野（よしの）　猛（たける）。
生徒会の中で唯一の常識人だ。
美形で、男の俺から見ても美しいと思う。

『これから生徒集会を始めます。』

吉野先輩が開始を宣言し、舞台上の席に着く。
それと入れ替えに生徒会長がマイクの前に立つ。
生徒会長の名前は知らない。まあとりあえず生徒会長は王道とらぶちゅっちゅしてくれてたらいいのだ。

まあ、そんな会長もそこらへんのモデルになんか負けないレベルの美形なのだが。

でも俺は腐っているだけでノンケなので関係ないが。

今日の集会は、生徒交流会の優勝者である王道が生徒会補佐になるという内容だった。
交流会は5月にあり、俺は7月前半からの編入なので、とても美味しい行事を逃して少し後悔をする。
が、そこは輝がムービーを撮っていてくれたのでまあよしとしよう。

生徒会長が色々話しているが、俺は寝不足もあり、うとうとしていた。
ガタガタと生徒が席を立つ音で目覚めた俺は、いつの間にか本当に寝てしまったらしい。
それでもまだ眠くて、しばらくボーッとしていると、殆んどの生徒が出て行った頃に
視界に黒い物体が入ってきた。
眠くて視界がぼけている目でもそれが王道ということには気が付いた。
俺はまた来た。とおもい、立ち上がろうとするが、体が重い。
いつものことだからいいかと諦め王道が近づいてくるのを見つめていた。

.

主要人物5

「拓海っ、まだ帰らないのか？！」
「ちょっと、体がだるくて。」
「大丈夫か？！一緒に帰るか？！」
「いや、だいじょう「由宇！いきなり駆け出してどうしたんだ？」」
俺が王道の言葉を断ろうとすると会長がやってきて話が途切れた。
「あ、幸次郎！こいつ、俺の友達の拓海！なんか体がだるいんだって！」
あ、会長、幸次郎（こうじろう）っていうのか。
「…へー、友達。」
「そう！友達！」
「友達サン、大丈夫か？」
「大丈夫です。」
なんか、睨まれてる睨まれてる。俺悪くないですよ、多分。
「おいっ拓海！俺も一緒に居るぞ！」
「大丈夫だよ、鳴瀬君。ありがとう。」
「拓海！友達なんだから名前で呼べっていつも言ってるだろ！」
「…由宇、そいつは大丈夫だっつってんだ、お前は行くぞ。」
「ちょっと待てよ幸次郎！おいってば！」
会長が強引に王道を連れて行き、騒がしかった体育館はまた静まり返る。

特進科は授業免除というものがあり、授業に出なくても大丈夫なので、
俺はここでもうひと眠りしようと5つ並んだ椅子の上に横になる。
寝心地は悪いが、”あの時”に比べれば全然ましなので、きっとすぐに眠れる。
重い瞼を閉じかけたとき、聞きなれた声が喋りかけてきた。

「拓海君、こんなところで寝るつもり？」

吉野先輩だ。吉野先輩とは、編入したときに道を案内してもらい、そこから仲良くなった。

「…」
「無視するの？いい度胸だね。」
「…眠い」
「眠いって…。こんな所で寝たら風邪引くよ？」
「大丈夫、慣れてるし。」
「慣れてる…？」
「…ほんの2，3時間だけです。」
「長いよ！こんな所で寝るなら部屋でなさい！」
「…だるい」
「…拓海君？」
「…わかりました」

吉野先輩のオーラが黒くなったので大人しく起き上がる。
吉野先輩は、いつもはニコニコしてて優しいけど、怒ると怖い。まあ、族の副総長だそうだし、
それぐらいの殺気というのか、なんというのか、そういう空気を出せるのは当たり前なのだろうか。
のっそり起き上がった。でも、本当に寝不足なのか目眩がして、床

に倒れる。

「拓海君？！」

「…いた」

「いた、じゃないよ！大丈夫？」

「多分」

「もう！ほら、保健室連れて行くから、背中に乗って！」

吉野先輩はこの年にもなって負ぶわれろというのか。

それは断じて嫌だ。俺がいやいやと首を振ると、吉野先輩は溜息を吐き、俺を持ち上げた

「おんぶが嫌なら抱っこだよ。」

「…うー」

これはおんぶ以上の屈辱だ。だが今これ以上動かされると

本当に吐きそうなので、大人しく吉野先輩の意外にたくましい腕に抱かれていた。

「拓海君、ちゃんと食べてる？軽すぎるよ」

「食べてますよ。それに、そんなに軽くないよ」

「ううん、軽い。体重何キロなの？」

「…しらない」

「いいなさい」

「…５６ｋｇ」

「！…軽すぎる」

「…」

「…まあ、今はいいです。また今度じっくり聞くからね」

「…はい」

吉野先輩の腕に包まれ、ゆらゆらと浮遊感を感じながら、瞳を閉じる。少し、眠れそうだ。

.

主要人物6

猛side.

体育館で椅子の上に横になり今にも寝ようとしてる生徒を見つけ、声を掛ける。
予想していた通り、最近転校してきた”長谷部　拓海”だ。
彼は基本的に無表情で、いつもボーっとしている印象を受ける。
喋り方ものんびりしていて、性格もよくつかめない。
外見は、明るい金に近い茶色の髪型に右目に眼帯をしていて、
この間眼帯をしている理由を聞いたら、無言で返されたから、あまり話したくないのかもしれない。
でも、彼は結構無言なので詳しい所は分からないけどね。

少し話がそれたね。彼の外見は、髪の色もそうだけど、顔がとても整っていて、
彼自身は気づいていないみたいだけど実はもう親衛隊が出来てるんだよ。
無口なのも、ミステリアスでカッコいいって評判みたい。
僕から見てもとても綺麗だしね。でも、カッコいいというよりは可愛いと思うんだ。

声を掛けると、どうやら寝不足らしい。起きる気がまったくないみたい。
でも、こんな所で寝たら風邪を引くからといって、半ば脅し気味に寮へ向かわせることにした。
渋々体を持ち上げ、立とうとしたときに、グラリと彼の体が揺れた。
自分が痛いというのに、彼はまるで他人事のように反応が薄い。

そういうところが放っておけない。
保健室へ連れて行こうと、彼を負ぶおうとすると、いやいやをされた。
その容姿でそれをされると、どうにも腰にクル。
しかしそのままにしておけるはずがないので、仕方なく彼を抱っこする。
所謂お姫様抱っこだ。

彼は抵抗しなくて、僕の腕の中にすっぽりと納まっている。
そんな彼は、平均より少し低いぐらいの身長なのに、とてつもなく体重が軽かった。
体重を聞くと、知らないといわれ、また脅し気味に聞くと５６ｋｇと答えた。
…軽い！軽すぎる！ちゃんと食べているのか気になり、体調が悪いのもその所為かと聞こうと思ったら、
彼は僕の腕の中で眠っていた。
もうすぐしたら保健室に付くので、それまでは寝かしてあげよう。

2，3分たって、保健室に付いた。ドアをノックし、返事を聞いてから片手で彼を抱え込み、ドアを開ける。

中に入り、今年入ってきた保険医の姿を探す。
保険医はデスクに座り書類を見ており、僕の方を見たあと腕の中にいる彼をみて、表情が変わった。

「拓海?！」
「！?」
「…どうしたの?倒れたりした?」
「あ、はい、倒れたというか、ふらついてこけた感じで、ついさっ

き寝たところです」

「……そっか、運んでくれて有難う。後は任せて。」

.

保険医1

拓海ｓｉｄｅ.

「拓海?!」
「!?」
「…どうしたの?倒れたりした?」
「あ、はい、倒れたというか、ふらついてこけた感じで、ついさっき寝たところです」
「……そっか、運んでくれて有難う。後は任せて。」

竜(りゅう)さんと吉野先輩の声で目が覚めた。あのまま少し寝たみたいだ。

「…りゅーさん?」
「あ、拓海、目覚めた?」
「…んー」
「……拓海君、」
「…先輩。すみませんでした」
「おい、拓海!お前また夜更かししたのか?」
「…」
「無言は肯定と取るけど。」
「……」
「はぁ。…とりあえず、えっと、吉野君?ありがとね。」
「あ、いえ…」
「…先輩、ありがと」
「うん…。お大事にね」

そういい、俺を椅子に降ろすと吉野先輩は出て行った。
その瞬間、横から鋭い視線を感じた。

「…た・く・み？」
「…はい」
「お前、また朝まで小説読んでたんだろ」
「うん…」
「うんじゃないだろ。危ないのは拓海なんだからな」
「うん、ごめんなさい…」
「はぁ…。」
「…ごめん」
「…もういいよ。ちゃんと限度を考えな。」
「うん…」

「んじゃあ、ついでだし現状報告ね。」
「ん…」

「編入して夏休みを挟んで1ヶ月ちょいだけど、学園にはなれた？」
「うん」
「悩みごととかはない？」
「…いままでどおり」
「…そっか。うん。じゃあ、最近楽しかったことは？」
「吉野先輩と仲良くなれたこと。」
「ふーん。仲いいんだ？」
「多分。わかんないけど」
「まあ、さっき見た感じでは、仲よさそうだね。吉野君も拓海のこと気に掛けてくれてたし。」
「うん」

「そうだな、それじゃあ、…目の調子はどう？」
「…」
「無言じゃわからないよ」

「…普通。時々、痛くなる。」
「そっか、まだ痛いのか。」
「でも、大丈夫。”あの人”の痛みに比べれば、全然平気。むしろ、俺はもっと…「拓海」」
「…ごめん」
「いいよ、大丈夫。分かったから。」
「…うん」

「それじゃあ、もう寝なさい。昼になったら起すから」
「…ん」
「おやすみ」
「…おやすみ」

保険医2

竜side.

保健室で書類を纏めていると、扉がノックされた。
「はぁい～」と気の抜けた返事をすると、すぐに扉が開く。
そこをみると、名前はしらないけど、多分この学園の副会長をやっている、
綺麗と有名な人物が誰かを抱えて立っていた。
抱きかかえられている人物に目を向けると、あまりにも見慣れている姿で、少し吃驚(びっくり)した。

拓海は、どうやら倒れたらしい。倒れたというか、こけたという表現が正しいのだろうか。
副会長にお礼を言った時に、拓海が目を覚ました。

「…りゅーさん？」

正直言って、こいつはとてつもなく綺麗だ。
そんなやつが寝起きのかすれた声で自分の名前を呼んだら、多分腰にクルのだろう。
だが、俺は付き合いが長いのでそこら辺は体性があるので
何もなかった風を装って会話をする。
副会長は、あまりの色気に戸惑っているみたいだけど。
まあ、戸惑っているのはそれだけではないんだろうけど…。
倒れた理由に心当たりがあるので尋ねてみると、案の定、夜更かし

をしたらしい。
前に保健室に来たときも夜更かしで具合が悪いと言ってきたのだ。
今は全体的に、体がボロボロなのに、夜更かしなんて体に毒だ。と毎回言っているのに
それでも夜更かしして小説を読んでいるコイツは、どれだけ腐っているんだか。
けれど、これで3回目となると流石の俺も怒る。
結構強めに叱ると、シュンとなって謝ってくる。
あー、俺はコイツのこういうところに弱いんだな。つい、甘やかしたくなってしまう。
もう一度軽く念を押して、次は恒例の質問タイムだ。
拓海の現状を報告してもらい、軽く話しをしてから、拓海を寝かした。
寝ている拓海の頭を軽く撫でる。
まつげが軽く震え、そういう動きすらも色気がある。
頬を軽くなで、右目の上にある眼帯をそっと外す。その目には、痛々しい傷が未だに残っていた。
まあ、回復するのは早いほうだが。　…傷、残るのかな。
もう一度頭をなで、書類に取り掛かる。
.

保険医3

ここで、俺のことが気になっている人も居るだろう。少し、自己紹介でもしようか。

俺の名前は、室井（むろい）　竜（りゅう）だ。

職業は、精神科医。所謂、心理カウンセラーというやつだ。

なぜその俺が鳴瀬学園の保健室に勤めているのかというと、この拓海が居るから。

――――……

俺のやってる精神病院に、拓海がやってきたのは、今から8年前。

身体中、あざや傷だらけの少年が病院を訪ねてきた。

その少年が、8歳の頃の拓海だった。

その日から、拓海は度々やってくるようになった。しかし、会うたび、傷は増えていた。

毎回会うごとに、個人的にも仲良くなり、色々な話をした。

拓海の考えていることや、兄弟の話や、友達の話を沢山聞いた。それが8年間続いた。

俺は所詮カウンセラーなので、その間なにもしてやれなかった。

拓海は、話を聞いてくれるだけで嬉しいといっていたし、俺もそれが仕事だが

どうしても、どうしても悔しかった。

その頃の拓海は、まだ幼く、顔もかっこいいというよりは可愛かっ

たし、人懐っこかったので
他の職員にもとても人気で、その職員達も拓海が帰ると、何も出来ないのが悔しいと涙を流していた。

拓海は、段々傷が増え、心の傷も増え、あまり笑わないようになった。
（まあ、新しいＢＬ小説がどうのこうのと話をするときはニヤニヤしていたが。）
そして、今年の春、悲劇が起きた。　拓海は、右目の視力が殆んどなくなった。
流石に、これには俺達も黙っていられず、
拓海の友達の輝くんのお父さんの知り合いが経営している鳴瀬学園に編入させることにした。

それには、もともと鳴瀬学園に通っていた拓海の弟はもちろん、
社会人のお兄さんも賛成してくれた。それによって拓海の編入は決定した。

それと同時に、俺の長期出張も決定した。
今の拓海を１人にするわけにはいかないんだ。
実際、弟君も輝君もいるのだが、友情は一番の薬だが、
やはり友達には言えないモヤモヤもある。俺は、そのモヤモヤの捌け口になっている。

まあ、そんな感じだ。
拓海の身になにが起こったのか詳しく知りたいやつは、今度拓海に直接聞くんだな。

.

ものもらい

「拓海！友達同士は隠し事はしちゃいけないんだぞ？！」
「はあ…。そう言われても…。」

なぜ俺が今教室で王道に迫られているかというと、それは１０分ほど前に遡る――…

俺は、太陽の光とグラウンドで動き回っている若者の声で目を覚ました。
保健室のものにしてはとてもやわらかいベットから身体を起こし
竜さんに挨拶をしてから、教室へ帰ろうと保健室のドアを開けたようと取っ手にてを掛けた瞬間に
ドアは開いた。目の前には王道と同じクラスの”間宮（まみや）　楓（かえで）”と鴇田がいた。
王道は俺を見るなり飛びついてきた。寝起きなのもあり、少しグラッときたが
小柄な王道なので倒れるまでには至らなかった。

そのまま離そうとしても離れない王道を抱えながら教室に向かう。
王道はなにやらブツブツ言っているが、面倒なので無視だ。てか、降りろよお前。
首筋にお前のモサモサヘアーが当たってるんだよ。くすぐったいってか、キモイ。
心の中でそんなことを思いながらも地道に廊下を進む。

鴇田は王道に惚れているからか少し羨ましそうな目で俺の腕の中にいる王道を見つめていた。

「…鴇田がする？…だっこ」
「え！？あっ、ううん！！遠慮しとく！」
「そ？」

一応、鴇田に聞くと凄い勢いで遠慮された。ん？鴇田は王道がすきなんだよな？
まあ、今は何でもいい。とりあえずこの重荷を下ろすのが先決だ。

そうこうしているうちに教室へついた。
そしてなにやら考えがまとまったのか、俺は王道によって壁に押さえつけられ、尋問されている。
どうやら、王道は俺が眼帯をしている理由が知りたいらしい。俺は無言。
そこで冒頭部分に戻る。

お前と友達になった覚えはまったくないし、むしろ嫌いだし、
隠し事といえば、お前の素顔はどうなのだろう。俺達が仮に友達だとしたら、
変装なんて眼帯と比べ物にならないし、もってのほかじゃないのか？
そんなささいな疑問を心の中で呟きながらも無表情＆ａｍｐ；無言で未だに喚いている王道を見つめる。

「なんで俺のこと無視するんだよ？！　俺達友達だろ？！友達のことは無視したらいけないんだぞ？！」
さすがに無視し続けるのも可哀相だったので口を開く。

「すみません、ものもらいにかかってまして、移してはいけないかと…。」

そういうと、俺達を見ていたほかのクラスメイト達は一斉に吹き出した。
それには俺も王道も訳が分からずキョトンとした。

「ちょっ、お前っ！それは無理あるだろっ！」
「もっ、ものもらいっ！」
「お、お前、編入してきたときから眼帯つけてたじゃねーか！どんだけ長いんだよ！ぶふっ」

どうやら、俺のいいわけが面白かったみたいだ。その人達に続いて色々な人が笑いながら喋る。
王道は何が何なのか分かっておらず、これは好都合だと俺は自分の席に付いた。

.

担任

自分の席に座ってさっきの言い訳を振り返る。
冷静に考えれば、一ヶ月と少しの間ものもらいにかかり続けているというのはおかしな話だ。
焦ってたとはいえ、もう少しましな言い訳をすればよかったか…。
1人後悔しているときに、誰か近づいてくる気配がして顔をあげると、間宮がいた。

「は、長谷部君っ」
「なに？」
「あ、あの、さっき、由宇が強引に…、ごめんね」

どうやら、間宮は鳴瀬が強引に俺に詰め寄ったことを謝っているようだ。
間宮は多分、基本無表情な俺が苦手なのだろうか、どもりながら女の子のような愛らしい顔をこわばらせていた。
王道に振り回される脇役の間宮は案外好きだ。なんか、守ってあげたくなる感じだ。
王道と付き合うのも大変だろうに、いつも頑張っている。……ご愁傷様です。

「あー、うん、大丈夫。間宮も、お疲れ様」
「…？うん」
「うん、頑張ってね」

俺はそういって間宮の頭を軽く撫でる。すると一気に顔を赤くして

数歩後退り、じゃっじゃあ
とどもりながら去っていった。そんな初(うぶ)な間宮を微笑ましく思っていると
数学教師が教室に入ってきた。どうやら次の時間は数学のようだ。
数学教師の田部(たべ)は特進科の担任であり、生徒会顧問だ。
王道学園の王道の担任といえば、ホスト教師。
田部も例外ではなく、ホスト顔負けのルックスにスーツを軽く着崩した、所謂大人の色気ってやつが駄々漏れの男だ。
勿論、田部も王道に惚れていて、初日から哲也(てつや)というなんとも男らしい名前を呼ぶことを許した。さすが、王道。

そんな担任を横目でみつめながら、俺は机から本を取り出す。
黒い皮のブックカバーをつけているそれは、正真正銘のＢＬ小説だ。
俺は腐男子に誇りを持っているし、別にここのやつらにどう思われようがいいので
最初は表紙そのままに本を読もうとすると輝に思い切り止められたのでカバーをつけることにした。
周りから見れば普通に本を読んでいるのだろうが、中身は男同士のにゃんにゃんだ。
まあ、自分達もゲイなのでどうってことないのかもしれないけど。

まだ休み時間なので本の続きを黙々と読み進める。俺はいつも輝と行動しているため
輝が居ないといつも本を読んで大人しくしている。俺が1人のとき時々クラスメイト達が寄ってくるが、
特に仲良くもないのでいつも一緒というわけではない。
俺はいまだ眠り続けてるであろう輝に若干苛立ちを覚えながらも本を読む。

.

担任2

そうこうしているうちにチャイムが鳴り授業が始まる。
いくら金持ち学校といっても、やはりチャイムは恒例のあれだ。

いまやっている数学の内容は、小さい頃本棚を漁っているときに兄さんの教科書を読んだので数式は理解できる。なので、聞いてなくても問題はない。
正直、特進科は授業免除がされてるし、その中でも頭のよさで特進科に入った俺がいちいち授業受けるのはめんどくさい。
だが、周りの好意で入れさせてもらった学校の授業をサボりまくるのはさすがに失礼なので、俺はいつもいたって真面目に授業に取り組んでいる。
といっても大抵は寝ているかボーっとしているか聞いてる振りして実は妄想とか、そんなことばかりだけど。
しかし輝のいない教室は、弄るやつがいなくて果てしなくつまらない。こういうときに自分の中の輝の存在の大きさを思い知るのだ。
俺にこんなに必要とされて、まったく輝は幸せものだ。

そんなことを考えながら、黒板に数式をカツカツと書いている音とノートにペンを走らせる音が心地いいと思いながらもボーッとする。
しばらくすると授業終了のチャイムが鳴り、「それではここまでー」という田部のやる気のない声が響き、なんともつまらない授業を終えた。

次の授業を確認すると、体育だ。面倒だと思ったが、どうせ出ないし関係ない。俺はサボるために1人屋上へ向かう。…いや、向かお

うとした。
が、王道に片腕をつかまれて俺は動けない状況に居る。

「…どうかした？」
「拓海、また体育でないのか？」
「うん、体調があまりよくなくて」
「いつもそうだろ！本当は体育に出られない理由があるんだろ？！」
「いや、だから」
「友達同士の隠し事は無しだっていったろ！！本当は大きな病気にでもかかってるのか？！」

…でた。［うざいほう］の王道の妄想。
俺は断じて病気なんかにかかっていない。だが、この場合病気ってことにしとけばこの場はしのげるか。俺はとりあえずこの場を脱却したくて、肯定をしようとした瞬間に誰かに後ろから抱きつかれた。

「ごめんね由宇、こいつ昔から体力なくてさー。」
「輝！遅かったなー！」
「うん、寝坊しちゃってさ。由宇たちは今から体育だろ？俺拓海と一緒にいるから、行って来いよ」
「でも！」
「でもって言われてもなぁ。体力はどうしようもないし…。無理に出て倒れちゃったりしたら大変だしなぁ」
「そっかぁ…」
「うん、てことで今日は拓海も俺もサボるから！由宇たちは早く行かないと遅刻になるぜ？」
「あっ本当だ！もうこんな時間！ほら、行くぞ楓、志羽！それじゃあ、ばいばい！」
「ばいばーい」

.

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5008y/

悲しみの海

2011年12月18日03時09分発行